

精神看護学実習における臨床指導者と教員の協同のかたち～普遍的な共通理解の新たな構築を目指して～

○佐藤 美保¹⁾、田野 将尊²⁾、茅根 寛子³⁾、渡辺 純一³⁾、浅沼 瞳⁴⁾、小川 賀恵⁵⁾

1)杏林大学 保健学部 看護学科 看護学専攻、2)医療法人 埼玉会 埼玉草加病院、

3)公益財団法人 井之頭病院、4)昭和大学 保健医療学部 看護学科、5)東京医療保健大学 立川看護学部

パンデミックや災害のように自己の存在が脅かされる出来事を経験し、希薄化された人間関係と益々複雑化する社会というストレスフルな環境下において、私たちには今を生きる人々に対して、メンタルヘルスの向上やこころのケアに貢献できる実践者の育成が求められています。そして、そのような社会における看護へのニーズに応えるべく、地域における当事者および家族への援助能力、多職種と連携し協働する能力、ICT (Information and Communication Technology) の活用能力などを育成する必要性が増しています。さらに、教育の対象である看護学生に目を向ければ、このパンデミックが学生に与えた社会性やこころの発達への影響を考慮した教育を提供する必要性も感じます。

すでに各教育機関において、様々な新しい教育的試みが実施されています。特に精神看護学実習では、精神科領域の看護過程展開に重点を置いた病棟実習の継続、医療の地域移行に合わせた地域実習の重視、患者-看護師関係構築をはじめとした対人援助能力の育成、教育DX (Digital Transformation) やICT教育の活用など、多岐に渡る新旧の工夫が複合的に取り入れられています。また、臨地実習を受け入れている臨床指導者は、教育機関が求める多種多様な実習目標に応じながら、自身が学生に伝えたい精神看護への思いやより実践的な知識や技術と、それを教授する時間的制約や変化する指導方法などに対する葛藤の中、学生たちが実習目標を達成し成長できるよう日々奮闘しています。

このように、臨床指導者と教員それぞれが、より良い精神看護学実習を目指して試行錯誤を重ねてい

ますが、それは混沌としており何をどのようにすれば良いのか、私たち自身が精神看護を見失いかねません。今だからこそ、精神看護学実習における普遍的な共通理解の新たな構築が求められているのではないのでしょうか。臨床指導者と教員、一見すると立ち位置は異なるようであっても、精神看護を学修する学生に対する眼差しに大きな違いは無いと感じます。実習は、患者-学生-臨床指導者-教員の4者の関わりが基盤にあり、なかでも臨床指導者と教員は、共に実習環境を協同して創っていく立場にあると考えています。こころに傷つきを抱えた人々に寄り添った精神看護を実践できる看護師を育むためには、人との関わりに戸惑いを覚える学生たちが安心して実習を行えることが必要であると考えています。学生に安心した教育環境を提供するため、まずは私たちがお互いの職域を超えたつながりを培うことが重要です。

私たちは、これまでにも精神看護学実習における臨床指導者と教員の協同をテーマとして各種ワークショップを開催してきました。本ワークショップでは、企画メンバー間の関係性構築の経緯や精神看護学実習における臨床指導者と教員のコミュニケーションの実情に関する調査結果をご紹介させていただき、臨床指導者と教員それぞれの立場から精神看護学実習への思いや考えを共有し合い、ざっくばらんに和気あいあいと語り合いたいと考えています。倫理的配慮として、互いのプライバシーが守られ、安心して話し合える場を作ってまいります。ここに来て、お気軽に日頃の思いを話してみませんか。是非、ご参加いただけることをお待ちしております。